

# 草庵仏教

第129号  
(発行日)  
2001年3月1日  
発行所：真宗大谷派念佛寺  
〒6638126 西宮市  
小松北町1-2-3  
電話・FAX(0798)  
41-5346  
(発行人) 土井紀明  
メール naridoi.ne.jp@lycos.ne.jp  
http://members.tripod.co.jp/souan211

## 《 聞法会ご案内 》

- \* 同朋の会(念佛寺)  
22日午後2時  
.....
- \* 聖典講座(浜屋西宮店)  
第1土曜日午後3時
- \* 念仏座談会(念佛寺)  
第3土曜日午後3時

## 仏事としての読経

J「父が亡くなって一ヶ月あまりになりませんが、その間、住職さんにお参りしていただき有難うございます。ご住職にお経を讀んでいただいている間、私は〈父があので幸せになりますように〉と、心の中で祈っています」

D「お父さんのことを思い続けておられるんですね」

J「ええ、父は生前中、随分悲しいことや苦しいことが多かった人ですから、せめてあので幸せになつてほしいです。住職さん、父は今度は幸せになれるのでしょうか……」

D「お父さんが亡くなってどうなるのか、本当に幸せになれるのだろうか、と心配しておられるんですね」

J「ええ。そのために住職さんからお経を上げていただいているのですが……」

D「お経を上げて、お経の功德を亡き人に廻向し、少しでもいいところに生まれるようにという、世間でいう追善供養ですね。それは、親しい人と死別した人の悲嘆の心の傷や、あもしてあげたかった、こうもしてあげたかったと悔やむご遺族の心を癒すという意味で行われてきたと思います。日本だけではなく中国でもずっと行われ、それが

あたかも仏教の中心であるかのように思われてきました。けれども親鸞聖人はこういう意味での追善供養をされませんでした」

J「真宗ではなぜ追善供養のためにお経を上げないのですか」

D「思いますに、僧侶が遺族の追善の願いにしたがって、經典を讀誦する時、僧侶は生者と死者をつなぐ人と見られ、読経の功德を死者にふり向けて与えてくれるのだと、一般に思われてきたのではないのでしょうか。しかし本来、僧侶とは自ら仏法の真実を求め、また人々にも仏法をお伝えするのが第一義であつて、僧侶を死者供養の専門家やときには靈能者のように見るのは間違いです」

J「私たちは、お坊さんにたのんで先祖供養してもらおうという気持ちの中に、在家の者にはできない死者への橋渡しとしてお願いしているような気持ちがあります」

D「読経は功德であるという点とは、間違いありません。なぜ功德かという点、読経するといふことは仏の説法を再現し、仏の言葉に生者も死者もともにであらう、仏のまことをいただく大事な機縁になるからです。ところがややもすると、読経するこ

とが、なにか呪術的・神秘的な功德と受けとられ、經典を讀誦することを呪文のように思つて、その功德を死者に手向けるという形式的あるいは神秘的な行為になつてしまつています。正直なところ、気休め、慰めに墮しがちです」

J「私もお経を何か神秘的なご利益がある呪文のように思つていました。読経のご利益を亡き父に回向していただいているのだと思つていました」

D「しかも、僧侶が読経している間、後ろで聞いている遺族にとっては読経はひとえに〈亡き人のため〉とだけ思いがちです。しかし本来、經典を讀誦していただくことは自分自身が仏法にあり、仏法を敬い、仏法を聞く儀礼であつて、いわば自分自身が仏法に会わせていただく縁であり、そのご縁において、亡き人も僧侶もともに仏法にあわせていただくのです」

J「坊さんにお経を讀んでいただくのは、先ずは私自身が仏法にご縁を結ばせていただき、仏の教えにあわせていただくためなのですね」

D「ええそうです。それがご先や亡き方が本当に喜ばれ、心休まることだといわれています。要するに私自身を抜きにしてお仏事はないのです」

J「私は今まで、坊さんのお経

を讀む功德によつて亡き人が救われていくように思つていました」

D「僧侶の修行の力とかお経を讀誦する功德は非常に限られています。いかに修行している自力の修行僧でも自分自身をすら救うことは容易ではありません。いわんや他者を救うことは大変困難なことです。親鸞聖人は二十年の比叡山でのご修行で、このことを痛切に感じられたのだと思ひます。たんなる經典讀誦の功德によつては、自分自身はおろか他者を救うことの無力さを痛感されたのでしょうか。だから私がお父さんの前で經典を讀誦しその功德で、お父さんがもっとよい境界に生まれるようにすることなどもできるものではないし、またそういう意図で読経しているではありません」

J「では真宗のお坊さんがお経を讀まれるのはどういう意味ですか」

D「真宗で讀誦される經典は浄土三部經といわれている三種類のお経で、これらの經典には積尊の説法が記されています。ですから、經典を讀むことは、積尊の説法を再現し、積尊の説法を聞かせていただくことになるのです」

J「お経を上げるということとは、積尊の説法を再現することなのですか」

**D** 「ええそうです。ですから僧侶は袈裟・衣を付けるのです。袈裟は釈尊のおさとの印しるしと聞いています。それで、袈裟・衣を付けて経典を読むことは、釈尊に代わって説法をすることになるのです」

**J** 「ですから読経中に後ろに座るといことは、釈尊の説法を聞いていることなのですね」

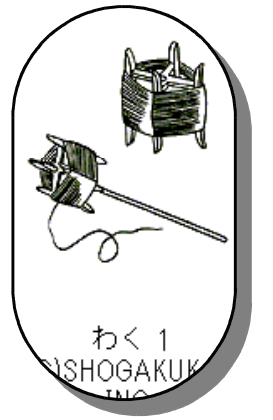
**D** 「ええそうです。その説法は後ろにおられるあなただけではなく、読んでいる私自身も、また亡き方々、ご先祖もともに聞いておられるということです。それが亡き人々、ご先祖が最も喜んでくださることでありましょう。そういうことが本当の先祖供養になるのでありましょう」

**J** 「しかし、お経を上げていただき、聞かせていただいているだけでも、読経の声を聞いているだけでは何が説かれているか全然分かりませんね」

**D** 「ええ、昔から読経の習わしとして漢文を棒読みにしますからね。ご希望なら漢文を現代文に口語訳したものを読んでもかまいません。経典も現代語訳されていますから」

**J** 「現代語訳の経典を聞いても何か味気ないし、聞いたからといってすぐに分かりそうもないですね」

**D** 「ともいえますね。ただ、それじゃあ読経の声を聞くだけでいいのかというお尋ねですが、



お経の意味が分からなくても頭を下げてお経を聞かせていただくことは無意味だとか、つまりぬことだというものではありません。

経典の読誦を頭を下げて尊く聞くという姿勢は、経典をへ私の人生のまことのよりどころです。という仏法帰依の態度です。仏の説法を、私の人生を導く真実の言葉として敬い尊ぶ、その態度の表明です。仏陀の説法を尊崇する態度を儀礼的に表現した行為が、ご法事などで読経を頭を下げて聞かせていただく姿勢なのです。例えば、仏を合掌礼拝することは、心から仏を敬う態度を表明した姿であるように。仏法に入るためにはこうした儀礼が大事なのですね」

**J** 「分かりました。合掌礼拝したり、読経を、頭を下げて聞くという儀礼を通して仏法に育てられていくのですね。

では儀礼なら、お経に何が書いてあるのかは一切分からなくていいのですか」

**D** 「いいえ。浄土の経典の内容を分かりやすく説いてくださった善知識の言葉を読経の後で任職が拝読します。それは一般に

は蓮如上人の『お文』が読まれますが、『お文』でなくても歎異抄などのお聖教でも結構です。『お文』は経典の内容を聞いて分かるように書かれています。読経の後で、拝読されるお文などのお言葉を聞くことや、住職の説教を聞くことによって経典の内容にふれていくのです」

**J** 「分かりました。では話を元に戻します。

先ほど読経は、亡き父にたいして読経の功德を回向するのはなく、釈尊の説法を聞くのであるといわれました。そういうことが亡き父の幸せとどう関わりがあるのですか」

**D** 「先ほども申しましたように、私たち凡夫のなす読経の功德や善行などでは自分自身も他者も本当に救うことは極めて難しいことです」

**J** 「生きている私たちの力には大きな限界があるということになりますと、恩になった亡き父がどこかで迷っているのではなにかとか、本当に安らかな浄土へ生まれるのだろうかという不安は残ってしまいます」

**D** 「実は、浄土の経典に説かれているのは、そういう人間の苦悩をあらかじめ知りたもう大慈悲の仏のましますこと、その仏を阿弥陀仏といい、阿弥陀仏はすべての生者・死者とともに平等に救おうと大慈悲心より立ち上がってくださり、今も現に

救済活動（阿弥陀仏の本願力）をしておられること、それを感得された釈尊がその阿弥陀仏の救済をお説きくださったのが浄土の経典です」

**J** 「それであれば、浄土の経典に説かれた釈尊の説法を聞くことは、阿弥陀仏の本願力の働きを聞くことなのですね」

**D** 「ええそうです。万人を救いたもう阿弥陀仏のましますことを聞くのです。亡くなった人々のところにも、生きている私たちのところにも、あらゆる衆生のところに阿弥陀様はましまして、迷い苦しむものを安らかなさとりの境界（浄土）へ導きたもうておられることを聞かせていただくのです」

**J** 「私たちが亡き父を助けようとしてもそれは不可能に近いのですね。

そうするのではなくて、父を救いたもうのは阿弥陀仏に任せます。その阿弥陀仏に父の救われることをお任せさせていだこうと、このように受けとらせていただいたのですが」

**D** 「ええ、そう受けとっていただいたらいいと思います。そして、阿弥陀仏はあなたのお父さんばかりか、あなたご自身のところにも寄り添ってくださり、あなたに南無阿弥陀仏と喚びかけてくださって救おうとしておられます。そこに気がつかせていただくことがまた大事なことです」

**J** 「亡き父ばかりではなくて、父のことを心配している私自身もまた阿弥陀仏のお救いのお目当てなのですね」

**D** 「ええそうです。あなたは亡くなられたお父さんのことを心配しておられますが、目を転じると、亡きお父さんはかえってあなたを案じてくださっているかもしれません。ですからあなたが助からなければお父さんも安心できないのではないでしょう」

**J** 「そうですね。私は今まで亡き父のことばかりを心配していましたが、亡き父から私自身は心配されている身であることは気がつきませんでした」

**D** 「自分も亡き人もともに救おうと働きつめ、喚びつつ寄り添いたもう阿弥陀仏の本願を知らせていただき、あなたもお父さんも阿弥陀仏の慈悲のお助けにお任せしてお念仏申させていたいただきたいことです」

(了)

### 【電話相談室】

(秘密厳守・匿名可・無料)

(時間) 午前8時より午後10時まで

(電話) 0798-41-5346

(相談内容)

人生上のいろいろな悩み・  
信仰上の相談・仏事の相談  
\*相談員が留守の時がありますので予めご承知ください。

# 真宗聖典講座

「念仏もうしそうらえども、踊躍<sup>ゆやく</sup>歡喜のころおろそかにそうろうこと、またいそぎ浄土へまいりたきころのそうらわぬは、いかにとそうろうべきことにてそうろうやらん」と、もうしいれてそうらいしかば、「親鸞もこの不審ありつるに、唯円房おなじころにてありけり」

（歎異抄第九章の一節）

（現代語訳）「念佛を申しては、喜びの心は薄く、天におどり地におどるほどの喜びが湧いてまいりませんし、また急いで浄土へまいりたいと思う心が起こつてこないのはどういふわけでしょうか」とおたずね申しあげたところ、聖人は、「親鸞もそれをいぶかしく思っていたが、唯円房、そなたも同じ心であつたか」

## 〈歎異抄第九章第二講〉

唯円房は、親鸞聖人に、〈私には、信心が初めて起こつた時のような喜びが今は湧いてきませんし、急いで浄土に生まれたいと願つてやまないような心が起こつてきませんが、どうしたものでしょうか〉とお尋ねになつてゐるのです。

このような問題が唯円房に起こつたのは、経文に「踊躍歡喜」とあるお言葉に照らしてというだけではなく、当時、同じ法然聖人の流れをくんで浄土を願つて生きた念仏者の中に蓮華谷聖（ひじり）とよばれた人々のことが唯円房の念頭にあつたのではないかと梯實圓師は指摘し

ておられます。それによりますと、ここでの蓮華谷聖というものは、法然聖人の教えによつて念仏の教えに帰し、高野山で名利を離れて高潔な生活をしていた明遍僧都という方がいて、彼に師事した念仏者たちのことです。その中に「常陸の敬仏房」とか「松陰の顕性房」という人たちがいました。親鸞聖人と同時代の方々です。彼らの言行は『一言芳談』の言葉を通して知ることができます。敬仏房の言葉に（以下は現代語訳）

「浄土を願う者は、死をおそれてはならないという道理を、長年にわたつて好みならつてきたおかげで、この病氣も少し快方に向かうと、死なずにすむのではなからうかと、肝のつぶれるほど切なく感ずる。――だから浄土を願うほどのものは、是非とも、常にこの煩惱の身をいとい憎んで死をも好み願うほどの心がまえをもつべきである」

と。あるいは顕性房の言葉に

「世俗の地位や名譽や財産への執着をふりすてて、世間に背いて出家したときから、一刻も早く浄土へ生まれたいと思ひ、〈早く死にたいものだ〉と思へるほどにならうと修行してきた。そればかりを三十余年のあいだ思ひつづけてきたおかげで、いまでは片時も自分の〈死〉を忘れることもなく、すみやかに死んで浄土へ生まれたいと思つてゐる。だから病氣がよくなつて、死が少しでもさきへのびるようだと、胸がつぶれるほど、わびしく思ふ」とか

「早く死にたいものだ」と常に思ふのは、来世が救われるための第一のたすけになるものだ」とありま

敬仏房や顕性房などのように、世間の

欲望を離れ、来世に浄土に生まれることのみ目的を一途に定めて生きる念仏者たちのすさまじい生き方は〈仏法者〉〈後世者〉として世の人たちの尊敬を受けていました。これらの念仏者の生き様は、唯円房にも耳に入つてゐたと思ひます。こういう蓮華谷の念仏者に比べて、唯円房は自分の有様をかえりみたととき、大きなとまどいを感じたのではないでしようか。〈私は浄土に生まれる身にしてゐたのに、それを喜ぶ心が薄い〉とか〈いそいで浄土へ生まれたいという思いが起こらない〉とか、〈ちよつとした病氣にでもかかれれば死ぬのではないかと心細く思ふ〉など、これはいつたいうところとであるうか、ひよつとしたら私の信心は間違つてゐるのではなからうか、といううような惑いが唯円房の胸に起こつてきたのではないでしようか。

唯円房はこうした不審を抱えて日々を過ごしてゐたのですが、ある日思い切つて親鸞聖人に自分の正直な胸の内を告白しました。聖人から「それはそなたが本當にこの世をいとう思いがなく、浄土を願う心がおろそかだからだ」とか「そのようなことでは信心をいただいたとはいえない」とでもいわれるのではないかと唯円房は内心おそれていたかもしれません。蓮華谷の敬仏房とか顕性房でしたら、このように云つておしかりになつたのではないでしようか。

ところが親鸞聖人のお答えは予想外でした。

「親鸞もこの不審ありつるに、唯円房おなじころにてありけり。よくよく案じみれば、天におどり地におどるほどによろこぶべきことを、よろこばぬにて、い

よいよ往生は一定とおもいたまうべきなり。よろこぶべきころをおさえて、よろこばせざるは、煩惱の所為なり。しかるに仏かねてしろしめして、煩惱具足の凡夫とおおせられたることなれば、他力の悲願は、かくのごときのわれらがためなりけり」

現代語訳「親鸞もそれをいぶかしく思つてゐたが、唯円房、そなたも同じ心であつたか。よくよく考えてみると、天におどり地におどるほど喜ばねばならないことを、そのように喜ばないわが身を思うにつけても、いよいよ往生は一定の身であると思ひます。というのは、喜ぶべき尊いおみのりをいただいて、喜ぼうとする心をおさえとどめて喜ばないのは、煩惱のしわざです。しかるに仏は、このような私であることをかねてからお見とおおせられてゐることですから、他力の悲願は、このように浅ましい私どものためでありました」と。

この聖人のお答えは唯円房にとっては本當に有り難かつたに違ひありません。唯円房をしかるどころか、「私もあなたと同じ不審をもつてゐたのだよ」と同座してくださり、しかも「そなたや私のような喜びの乏しい煩惱具足の凡夫なればこそ」と如来の深い大悲をお伝え下さつたのです。

どこどこまでも凡夫に寄り添つてくださる仏心の深さに驚くと同時に、親鸞聖人の「念仏をいただいて称える人はすべて御同朋・御同行」と見たもうお姿に感動されたとうかがいます。（了）

# 信仰夜話

博多の万行寺に七里仰順という真宗の名師がいました。師のご縁に会うために全国から参詣者がたえず、門前に宿屋がならぶほどでした。

ある人が安心の定まらないのが苦になり、師に申しました。

「私は如来のご本願をウソとは思いませんが、今死ぬと取りつめてみると、どうも心が判然といたしません。それゆえこれでは信心をいただいたといえないと思います、安心ができません」

師「はつきりと浄土参りに間違いがないと思うのを信心と思っているのか？」ある人「そうでございます」

師「それが間違いである。よく水際を聞かねばならぬ。お浄土参りに間違いがないと思うのが信心ではない。信心というのは、本願を疑わないのが信心である。そこで本願に疑いさえなければ、そのほか心がどのようであつても大事はない」ある人「それなら今死ぬるとして見た時、心がボンヤリとしていても、よろしうございませうか」

師「そうじゃ。心がボンヤリとしていても、それなりを如来様が引き受けて参らせてくださるのである。全体、凡夫は心のボンヤリしたものである。それよりは、心の判然としないにつけても、これこそ凡夫である。凡夫を助けてくださるのが如来様の約束なれば、私こそいよいよお助けにあずかるに間違いはない」と喜ばなさい。

また凡夫は心のボンヤリとしたのが本性だから、今死ぬるといふ時にいよいよ

お浄土に参れるか参れないかを思うても参れるに間違いはないと思われるものではない。

お浄土に参れるか参れないかは、如来様の心配してくださることであつて、凡夫の案じることではない。もしそれを凡夫が考えたら如来さまの受け持ちの仕事が凡夫がするというものである。凡夫にはいらぬ心配である。参れるか参れぬかは如来様が五劫の間お考えくださつて、参れる筈のないものなれども、本願の約束で必ず参らせてやるのに間違いはない、私たちを喚んでくださるのである。凡夫の方ではただそのお言葉を目的に信じるばかりである。

参れるか参れぬかを案じるよりも、お助けくださるかくだされないかを思うてみなさい。そうすると何時思つてみても如来様のお約束は、(そのまま助ける)の仰せの外はないゆえ、何時思つてみてもお助けの間違わさぬことは思われる。安心は浄土に向かつて参れるに違いないと安心するのではない、如来様のお喚び声に向かつて安心するのである。(助けてやる、参ることを引き受けてやる)というお喚び声に安心するのである。」

今井昇道「病中感謝録」より。

真宗の聞法をする中で、方向違いをしやすい大事な点を明確に七里師はここで指摘されています。

師は「信心というのは、本願を疑わないうのが信心である」と言われています。私たちは――

仏様がおられることを信じるとか信じないとか、浄土があるかどうかを信じるとか信じないとか、今が仏の働きの中であることを信じるとか信じないとか、いろ

んな出来事は仏の計らいであることを信じるとか信じないとか――  
そういうことで(信じるとか信じない)とかをよく言っています。

しかし師は、信疑は「弥陀の本願」にたいしてのことで、真宗の信心は「弥陀の本願を信じる信心」であると云われています。このことを私たちは再確認しておきたいことです。

「私の生活がそのまま仏の働きの中であると信じています」というようなことをよく聞きますが、本人の信心の味わいとしてはそういえませんが、「こういうように信じること」が真宗の信心であるという間違つてきます。

というのは私たちが「仏の働き」という場合、その多くは私たち凡夫の想像やイメージであつて、漠然としたものだからです。凡夫の思いはどうとも思えて、当てにはなりません。

次に「全体、凡夫は心のボンヤリしたものである」「凡夫は心のボンヤリとしたのが本性」と七里師は仰せられます。これも大事なことでしよう。私たちはとかく、ハッキリと浄土に生まれると思いたいとか、如来をハッキリと感得したいとか、自分の罪業の深さをハッキリと自覚したいとか、すべては如来のお計らいであるとハッキリと目覚めたいというように、「これだ」「これでよし」「これでこそ」とハッキリと自分の心に確認をしたと思うのですが、「凡夫は心のボンヤリとしたのが本性」でいつまでたつてもボンヤリしたままです。大体、自分の心にハッキリしたものを確認しようというのがすでに自分の心を買いかぶつている証拠です。昔から「この心に相談するとラ

チがあかぬ」と言われてきた通りです。この心にハッキリさせるのではなく、すでにハッキリとしている本願の仰せを、仰せ通りに受け入れるだけです。

最後に「如来様のお喚び声に向かつて安心するのである」と言われています。阿弥陀仏の本願というのは端的な仰せとして私たちに喚びかけられています。「助けるぞ」「引き受けるぞ」「我が名を称えよ」の仰せであります。ハッキリと仰せ下さる如来の勅命(おおせ)に信順するばかりです。「凡夫の方ではただそのお言葉を目的に信じるばかりである」と仰せられるとおり、真宗の信心は仏の言葉を信じる信心であります。(了)

## 〈伍職つれづれ日誌〉

\*二月十日〜十二日。同朋会館へ。滋賀県から上山された三十数人ほどの奉仕団を担当。三班に分かれる。法話をして通じないもどかしさのまま終了。法話の内容のお粗末さが主因であろうが、現代は生命の危機感も自己批判の心も大変乏しくなっているのも一因ではなからうか。

\*二月十三日から十五日。同朋会館で教導研修会を受講。内容は同和研修。今回は現地研修ということで出席者が九十余人という多数。十四日には大阪市のA地区を訪ねて、お話を聞き、昼食をし、現地の人たちと交流。環境が大きく改善されていることを実感。「現代は差別が見えなくなってきた」とのこと。夜は会館で座談会。「部落民」は、当然のことながら実体的にいるはずもない。ただ、言葉を通して無意識に実体視してしまうところこそ差別の起る根源がある。

\*十九日。「朋友会」の学習会。林師が四十八願の現代的意味を発表された。

\*二十日。妻と大阪市浪速区の「人権センター・リパティ大阪」を見学。

